

第2回弘前大学人文学部ボランティアセンター活動報告会

—チーム・オール弘前の1年間とこれから—

総合司会：山口恵子

プログラム

開場

主催者挨拶 佐藤敬氏（弘前大学長）

弘前市長挨拶 葛西憲之氏（弘前市長）

野田村村長挨拶 小田祐士氏（野田村村長）

基調講演 室崎益輝氏（関西学院大学総合政策学部教授）

休憩

「チーム・オール弘前の1年間」動画上映

パネルディスカッション「チーム・オール弘前の1年間とこれから」

座長：飯孝行（弘前大学人文学部）

パネリスト：室崎益輝（関西学院大学）・渥美公秀（大阪大学）・北岡聖子

（弘前市市民環境部）・清藤洪三（弘前市民）・南部真人（弘前大学学生）・

日野口早希（弘前大学学生）・李永俊（弘前大学教員事務局）

閉会の挨拶 四宮俊之（センター長）

閉会

報告会の概略

1.挨拶

報告会はず、弘前大学・佐藤敬学長の「弘前大学人文学部ボランティアセンターの活動は、やりたい人をオーガナイズする力だ」という挨拶で始まりしました。続けて、学長は「その力を発揮できたのも、学外のサポート、弘前市民の皆様をサポート、なによりも受け入れていただいた野田村の人々のおかげと、感謝の意を述べ、今後の支援交流の継続を誓いました。

次に、葛西弘前市長からまず、犠牲者の方々への弔意の表明があり、弘前市被災地支援共同プロジェクトをたちあげた経緯について説明がありました。そのなかで、重要だったのが、3月23日の弘前桜祭の開催決定であったこと、その後、職員派遣、ボランティアセンター活動の支援、物資や機材の支援や寄贈、絵入りリングによる小中学生の交流、弘前の祭りへの招待や交流事業などを行ってきたことが話されました。最後に、市長は、今後の支援継続を表明して、

話を結ばれました。

小田祐土野田村長からは次のような挨拶（要旨）をいただきました。

ここまで、いましなければならぬことを考えてきた。今日、いただいた本をみていて、1年たったんだなと感慨を感じた。最初、弘前大学から応援が来ると聞いて、「なぜだろう」という思いがあった。住民は諦めムードで、なにもする気がおこらない。瓦礫を片付けようとしてもそういう気がおこらない状態だったと思う。住民は若い人がはいつてくれたと、よろこんだ。若い人を見て、住民ももう一度やろうという気がおきたのではないか。少しずつ街が家がきれいになってくる、もしかしたら、片付くんじゃないかという気になってきたのではないか。ここまで継続して、弘前が行政と学生とが支援していく。これからも、みなさんに元気をもらいたいと思っている。学生の方には、マニュアルがない、初めてのことにいかに対応したらいいかを学んでほしい。私が最初に職員にした指示は食料確保のための非常手段だった。緊急事態にはその場その場で判断をしなければならぬ。最後にわかったことは、「人には優しさと強さがあること」「人と人とは支え合っていること」である。

村長は、今後も引き続きの野田村支援を要請して、話を結ばれました。



葛西憲之弘前市長の挨拶



小田祐土野田村長の挨拶

2. 基調講演

基調講演は、「東日本大震災と災害ボランティア」と題して、関西学院大学総合政策部教授・室崎益輝先生がなさいました。経験に裏打ちされたお話は次のようでした。

被災された方に、20人にひとりボランティアが必要とすると、二万人のボランティアが必要だが、いきわたらない。一方では、行きたい学生がいるのだが、当初はそれをつなげられなかった。自治体職員の4人にひとりが亡くなられた現状では町づくりからの復興ができない。悲しみの積分値、変える土地を失った悲しみは大きい。その苦しみに応えるボランティアの質が求められる。長期にベタッと密着したありかたである。災害は社会を映す。大きく日本の生き方を変えるひとつのステップにしなければならない。若者がそれを身体で感じる。「学生がケガをすといけない」というが、それはその先の被災された方々のことを考えていないで、大学のことを考えている。どうやって学生がいくことができるようにするかを大学が考えるべきだ。教育としての位置づけが大事になる。これはボランティアの進化でもある。今回は、ボランティア文化元年である。ボランティアが地域づくりの担い手になる。行政と企業とNPO・ボランティアと市民社会の正四面体で地域を作っていく。衰退した地域コミュニティを新しい社会にするように作っていくのが重要だ。

笑みをうかべながら、室崎先生は社会の将来像を描いてくださいました。

休憩をはさんで、会場には学生事務局の福土君が編集した動画「チーム・オール弘前の1年間」が上映されました。瓦礫撤去や物資の仕分けにはじまる野田村の人々との交流の場面場面が音楽とともに流され、一同は感慨を新たにしました。



室崎益輝氏による基調講演

3. パネルディスカッション「チーム・オール弘前の1年間とこれから」

まず、座長の飯先生から、各登壇者に1年をふりかえっての発言がもとめられました。いくつか拾ってみましょう。日野口さん（人文学部3年）は「何かできないかと思い参加、そのなかで、人を支えるのは人の力、住民との関係が大事だと思うと同時に、人と自然との関係を強く考えさせられた」と述べました。清藤さん（弘前市民）は、「「なんとかしたい」と強気に思った。なんとか行動をおこしたい。市に登録して、学生といっしょに仕事をしてきた。学生はまじめだと思った。若いも年寄りも一生懸命に、仕事をした。のんちゃんねふたを作った。学生も市民もさまざまな思いで参加していることがわかった。福島の学生が泣きながら自己紹介したのが印象的。学生が行きは自信なさげ、帰りは自信があるようになっている、それを楽しみで参加したところもある」と学生との協働の楽しみを語ってくれました。南部君（人文学部4年）は、「公務員試験とのかねあいがきつい。でも、続けられたのは、野田村の人々がよくしてくれた、市民がいろいろ教えてくれるし、さしいれももらえた、自分の発案（のんちゃんねふた）が実現したのがうれしい」と笑顔で語りました。

室崎先生からは、「四文字熟語でいうと、3つ。自己実現（行くことで育っている、ひとりではできない、みんなならできる、被災地の交流でお互いに元



気をもらう)、共同連携(先生と学生、市民、先生がいっしょになって)、創意工夫(学生が新しいことをしていく、悲壮感ではなく楽しく)・・・さきほどの映像から非常によくわかったという発言が寄せられました。

渥美先生からは、「野田村の人が弘前、ありがとうといっているのがすべて。弘前のバスは定期便。大事なこと。繰り返し行くことで寄り添う。大学の縛りをくぐりぬけてやりとげる。感無量です」という感想をいただきました。北岡さんからは、学生と市民がいっしょに行くことが大事と李先生から相談をうけ、5月からチーム・オール弘前で弘前市の窓口として活動をしてきた経緯が明かされました。それをうけて、李先生は、「もともと涙もろいのがボランティアをやってもっともろくなった。チーム・オール弘前。なんとかしなければという思いで、さまざまな勝手をいわせてもらったのだが、おつきあいしていただいたみなさんにほんとうに感謝をいわせていただきたい」とお礼の言葉を述べられました。

今後の1年間について、渥美先生から、「被災された人から出発。弘前のバスが昼に来て帰ってしまう・・・日帰りではなくて。その日に帰らない。できることは残っているから、2、3泊のとまりでやること。農地を借りる、漁業体験をやりませんか」という提案がなされました。

会場の市民から、「野田村のニーズ」について質問があり、李先生や渥美先生が「みなし仮設への支援」「聞き取り調査」「みんなが立ち寄れる場の設置」などのプランが話されました。

このようにして、3時間の活動報告会は終了いたしました。そのあと、コラボ弘大1階で、懇親会が開かれました。

時間の割には盛りだくさんの内容でしたが、昨年1年をふりかえり今年1年につなぐいい機会になったと思います。参加者のみなさま、お疲れさまでした。

(教員事務局・作道)